



やけど治療の昔と今



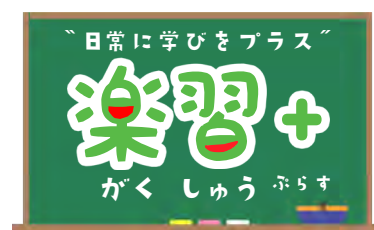
形成外科 科長代行
たかなぎ なお
高柳 奈央

「カップラーメンがこぼれてやけどをした」「走り回っていてポットが倒れてしまった」。いつもの生活の中でやけどは起こります。キッチン、食卓、リビング、お風呂場など、いたるところに危険があります。昔に比べて安全にはなっていますが、それでもやけどはなくなりません。人が人である以上、どうしても「うっかり」してしまうからなのかもしれません。

かつては「アロエを貼っておけば大丈夫」とか「つばをつけておけば治る」といった言い伝えがありましたが、医学が進歩するのと同時にやけどの治療も進歩しています。抗菌性のある貼り薬や治りをよくするスプレー、自己の細胞を培養して作る表皮シート、自己細胞から作る細胞スプレーなどが登場し、手術をしてもしなくても昔とは一味違う治療が増えていきます。このような進歩により皮膚のひきつれや傷跡を昔よりも

起こりにくく治せるようになりまして、昔のやけどのひきつれも改善できるようになってきています。

やけどへの理解が深まるにつれ、受傷からの経過時間が治療の要となることが強く認識されるようになりました。治療の手段を選ぶためには早めに治療を開始することが重要です。やけどをしてしまったら、流水で15〜30分以上冷やすことが理想ですが、保冷剤をタオルで包んだものでも、氷水の氷嚢でも構いません。まず冷やしましょう。やけどを冷やし始めたら、少し気持ちを落ち着かせ、安全にできるだけ早く受診してください。



切り花を長く楽しむための科学



静岡県立農林環境専門職大学
生産環境経営学部 講師
武藤 貴大
むとう たかひろ

花を買ったり、いただいたりしたとき、「できるだけ長く楽しみたい」と思う方は多いのではないだろうか。切り花の日持ちは、飾ってからの管理だけでなく、生産や流通の段階での取り扱いにも左右されます。切り花は収穫された後も生きており、水を吸い上げながら、蕾を開かせたり、美しい状態を保ったりしています。そのため、茎から水を吸いやすい状態を保ち、花の老化をゆるやかにすることが大切です。

生産や流通の段階では、花を長く美しい状態で届けるために、花の種類に合わせて前処理が行われることがあります。前処理には、水の吸い上げを助けたり、花の老化を抑えたりする役割があります。花の老化には、「エチレン」という植物ホルモンが関係する場合があります。エチレンは果物の成熟にも関わる物質ですが、花ではしおれや落弁などを早めることがあります。カーネーションでは、この影響を抑える処理が生産段階で行

われることもあります。また、収穫後、涼しい環境で保管・輸送することも、品質を保つうえで大切です。

家庭で花を長く楽しむには、市販の切り花用の栄養剤を使うことも効果的です。これは後処理剤とも呼ばれ、花のエネルギーとなる糖分や、水中の細菌を増やしにくくする成分が含まれています。栄養剤を使う場合でも、花瓶を清潔にする、茎の先を少し切り戻す、直射日光やエアコンの風を避けることも大切です。

